

# 男同士の絆と中間性

—— Edward Carpenter の同性愛議論 ——

金 田 仁 秀

## **Male-Male Bonds and the Intermediate Sex:**

Edward Carpenter's Arguments about Homosexuality

Masahide KANEDA



# 男同士の絆と中間性

—— Edward Carpenter の同性愛議論 ——

金 田 仁 秀

群馬大学教育学部英語教育講座

(2019 年 9 月 25 日受理)

## Male-Male Bonds and the Intermediate Sex: Edward Carpenter's Arguments about Homosexuality

Masahide KANEDA

Department of English, Faculty of Education, Gunma University

(Accepted on September 25th, 2019)

Paul Russell は *The Gay 100* と題された書物において、影響力を持ったレズビアン、ゲイをランキング形式で紹介している。そこでは Socrates、Sappho、Oscar Wilde と、レズビアン、ゲイを語る時には誰もが言及するような人物が上位に来るが、9 番目の人物として Edward Carpenter が挙げられている。その前後に、Karl Heinrich Ulrichs と John Addington Symonds を配していることを考えると、19 世紀後半に起こった同性愛解放運動の担い手を Russell が重視していることが伺える。実際、彼が述べるように、こうした人々は、現代のレズビアンやゲイというアイデンティティの形成に寄与したという点で、大きな影響力を持ったし、また持ち続けている。

しかしながら、Carpenter の名が現在、一般的に広く知れ渡り、また高く評価されていると言えるかといえば疑わしい。Sean Brandy が指摘するように、1970 年代後半から 80 年代 Symonds と共に Carpenter の同性愛者としてのアイデンティティが理解され出し、19 世紀末から 20 世紀初めのイギリスにおける同性愛を語る上では、彼は必ず言及される人物となった。<sup>1</sup> その点では、20 世紀後半の同性愛に纏わる認識や理解において彼は大きな役割を果たした。

しかしながら、同性愛解放運動のパイオニアとして、そしてしばしば称されるように預言者として、彼が存命中に受けた注目や尊敬を考えると、学問的な領域においてだけではなく、一般的に同性愛を含んだセクシュアリティの議論が比較的多くなされるようになった 21 世紀の今日、Carpenter への言及は再び減じてしまったように思える。これは、彼が同性愛解放運動のみに尽力したのではなく、特に社会主義運動に傾倒していたということとも関係するかもしれない。例えば、Sheila Rowbotham が描き出す Carpenter の生涯や仕事は、彼があらゆる面で社会主義と深い関係を持っていたことを示している。実際、彼は Bernard Shaw や William Morris らと親交があり、社会主義活動に積極的に関わりながら、例えば彼らと共に *Forecasts of the Coming Century* といった本も出している。<sup>2</sup> 他方、同性愛の観点でいうと、彼の主張の多くは大陸で発達した性科学などに依拠しており、独自性が乏しく思えるということも、彼の主張が今日大きく取り上げられない一因かもしれない。彼はしばしば Symonds と Havelock Ellis と並んで論じられるが、特に Symonds の歴史的、文学的考察は Carpenter に受け継がれており、似通った主張を見ることができる。<sup>3</sup> 或いは、Carpenter は

書き物よりも生き方そのものに興味が惹かれる人物であるという点も、彼の同性愛議論が一般的にあまり注目されない要因かもしれない。<sup>4</sup> この点では、E. M. Forster がミルソープを訪れた際に *Maurice* のインスピレーションを受けたというエピソードはしばしば取り上げられる。ミルソープは同性愛者を含む様々な改革に携わる運動者たちにとって巡礼地であった。しかしながら、彼は単にその生活によってのみ人々を惹き付けたのではない。彼は非常に多くの筆を執っており、その中には“Homogenic Love, and Its Place in a Free Society” (以下“Homogenic Love”と省略) や *The Intermediate Sex* といった同性愛に纏わる重要な文献がある。そしてそれらは、当時の言説と彼独自の理論の集合体として、貴重な歴史的テクストとなっている。

彼の主張や思想は、Whitman 的な男同士の絆と民主主義、身体と精神、中間性としての同性愛など、当時の同性愛の言説を考える上で重要な要素を刻印している。それは、犯罪とされた同性愛をいかに解放に導くのかという戦略とも結びついている。また、とりわけ本論でも詳述する *Love's Coming-of-Age* の内容が同性愛に限らず、広く性の問題について論じていることを考えると、Carpenter の同性愛議論は、現代で言えばジェンダーの問題と形容できる事柄と深く関係している。この点において、彼の主張を検討することは、単なる歴史的な考察にとどまらない。それは、多くの国や地域で非犯罪化されながらも、依然として抑圧のもとにある同性愛の解放を考える上で、有益な視座を与えてくれるのだ。このような立場から、本論では Carpenter の同性愛に纏わる主要な議論を取り上げ、その特異性と問題を考察したい。

\*

彼の詩作 *Towards Democracy* や同性愛に関する主張から明らかのように、彼の思想に大きな影響を与えた人物の一人は、アメリカの詩人 Walt Whitman である。彼自身が説明するように、Carpenter が Whitman の詩を初めて手にしたのはケンブリッジ在学中のことであり、それは 1868 年に William Michael Rosetti が編集して出版したものであった。

この版は“Calamus”の大部分や“Song of Myself”さえも含んでいなかったものの、Carpenter は熱烈に Whitman に惚れ込んだ。そして何通かの手紙を送った末、1876 年には彼から直接その年に出版された完全版を手に入れ、さらには翌年、切望していた面会を果たしている。

Carpenter 自身が述べるように、Whitman の詩において彼を惹き付けたのは“comradeship”の概念であった。それは彼にとって“near and personal”なものであり、Plato を初めとしたギリシャの作家においても見られないほど明白に表現されたものであった。<sup>5</sup> Carpenter は Whitman から受けた影響を自伝 *My Days and Dreams* において次のように述べている。

Ever since, in my rooms at Cambridge, I had read that little blue book of Whitman, his writings had been my companions, and had been working a revolution within me—at first an intellectual revolution merely—but by degrees the wonderful personality behind them, glowing through here and there, became more and more real and living, and suffusing itself throughout rendered them transparent to my understanding. I began in fact to realize that, above all else, I had come in contact with a great Man, not great thoughts, theories, views of life, but a great Individuality, a great Life. (85-86)

Carpenter は、*Days with Walt Whitman* において二度の訪問について詳細に語っているが、そこには彼への称賛が散りばめられている。追従者となったという点で、Whitman に見出したものは彼自身が目指したものと解釈されよう。彼は Whitman に傑出した個性を見出し、その社会変革の力と偉大さに注目する。そこで中心となったのが“comradeship”という概念であった。

Carpenter 同様に、Whitman の唱える“comradeship”に強く惹かれていた同時代の人物として、Symonds の名を挙げるができる。このことは、彼が私家版として出版した *A Problem in Modern Ethics* に如実に表れている。この絆が男性間の性的

な関係を含むのかどうかを Symonds が手紙で問いただしたことはよく知られている。<sup>6</sup> それに対して Whitman は完全に否定的な返答をしているものの、“comradeship”は同性愛と重なるものと解釈される余地が十分にあった。それは Whitman のエロティックな身体表現や特徴的な曖昧性もさることながら、同性愛者の視点からすれば、いわゆる友情と愛の連続性が自己認識の手助けとして機能したこと起因する。それは Whitman の言う“men like me”が共同意識を作り上げ、同性愛者というアイデンティティを形成する礎となったのである。<sup>7</sup>

しかしながら男同士の絆は、他方で Eve Kosofsky Sedgwick が指摘するように、ホモソーシャルな社会の基盤でもあり、男性中心主義社会の形成に重要な役割を果たす。そしてそれが異性愛体制に依存するという点で、ここでは同性愛嫌悪が胎動する。したがって、男同士の絆は、同性愛との近接と離隔という相反する動きを内包する。そのため、それが同性愛と交錯するよう見えれば見えるほど、より強い同性愛嫌悪が引き起こされるのだ。こうした拮抗をどのように処理するのかは、実際のところ、ゲイの政治学と異性愛体制の双方にとって現代まで続く大きな問題でもある。それは、身体と精神という二項対立と共にセクシュアリティに纏わる認識が生成され、異性愛と同性愛の境界を巡る闘争の場となっている。

同性愛として認識されるかどうかはともかく、Whitman の“comradeship”が特に男性と関わっていたことは明らかである。Byrne R. S. Fone が指摘するように、Whitman 自身も *Leaves of Grass* を「女々しい」芸術に対するアンチテーゼとみなしており、“man’s words”によって構成されるものと考えていた。Whitman によるとそれは、“all words that have arisen out of the qualities of mastership... words to identify... an... erect, sweet lusty, body without taint”であり、<sup>8</sup> 「男らしさ」をその中心に据えたものであった。Carpenter においては、男同士の絆は同性愛を擁護するだけでなく、推進するものとして利用されることとなる。それを最も表しているのは、*Ioläus: An Anthology of Friendship* である。ここでは

同性愛擁護で常套手段となる、歴史による権威付けと普遍化として、男同士の絆は機能する。

このアンソロジーは、異教の世界から始まり、ギリシャの実際の生活や思考、ギリシャやローマの詩、そして初期キリスト教と中世、ルネサンスから現代に渡る友情を紹介するので、その順に従って幾つか重要な箇所を見てみたい。Carpenter によると、“comrade-attachment”は原始的で野蛮な人々の間でも重要な制度として認識され、高く評価されていたとされる。彼は、人間の根源的な要素を見出すことで、それに国や地域を超えた普遍性を付与するのだ。古代において注目するものの一つとしては、彼が“military comradeship” (30) と呼ぶものがある。これは、同性愛の歴史的考察でしばしば言及される軍隊／恋人であるが、スパルタやクレタ島での恋人としての軍隊的絆や儀式が挙げられたり、テーベの軍隊が語られたりする。いずれにおいても、根本には年長者による教育という側面があり、制度としてギリシャの少年愛と近接するが、ここに戦士としての「男らしさ」が強調されているという点を見逃してはならない。それは社会変革への原動力となるもので、「女らしさ」や「女々しさ」とは異なるものなのだ。

ギリシャの生活と思想に関する部分では、当然のことながら Plato が主な話題となる。Carpenter は、ロマンティックな意味での友情の考えがいかに浸透していたのかを理解するのは難しいとしながら、現代の批評家たちの無理解を嘆く。それは“the chief source of their bravery and independence, one of the main motives of their art, and so far an organic part of their whole polity that it is difficult to imagine the one without the other” (41) であって、教育や哲学の礎なのだ。19世紀半ばに Benjamin Jowett が Plato の講義をオックスフォードで導入し、翻訳して以来、いわゆるギリシャの愛は制度化された崇高な同性愛を語る際に重要な支えとなった。Plato に関して言えば、精神性を強調することで同性愛を脱性化できるという点でも大きな役割を果たした。そこでは、女性と身体は感覚的で劣ったものとされ、男性との精神的な繋がりが昇華される。身体的な関係への言及を極

力避ける傾向にある Carpenter にとっても、Plato はこの点で有用だったと考えられる。ただ、彼はこうした二項対立に対して独特な解釈を与えている点は注目に値する。彼によると、ギリシャの女性を排除した文化では、女性による“saving, healing, and redeeming influence” (43) が失われてしまうため、一面的になってしまうというのだ。後に詳述する *Love's Coming-of-Age* における女性と結婚などの議論を踏まえると、Carpenter が女性に自由を与えることの重要性も強く認識していたことは確かである。女性に対してはステレオタイプの属性を付与してしまう傾向にあるものの、彼は男性のホモソーシャルな制度とは距離を置いている。男同士の絆を唱道しながらも、“more of a true comradeship between man and woman than it yet is” が達成されるならば、現代人を “a higher level of political and artistic advancement” (43) に導くと述べ、男女間の連帯の必要性も重視するのだ。彼は男同士の絆とは異なる同性愛概念として中間性も提唱するが、女性との連帯というこの主張は、それと間接的に繋がると考えられる。

女性の自由を唱える Carpenter が、女同士の絆にも目を向けていたことは、このアンソロジーを男同士の友情に限定していないことから示唆される。実際、続くギリシャやローマの友情の詩の章においては、僅かながらではあるものの Sappho の詩の断片も収録されている。19 世紀後半から 20 世紀の前半では、女性の同性愛について語られることは少なく、あっても主流であったのは、男性的な女性という性科学に基づいた認識であった。1928 年出版の *The Well of Loneliness* は、それがいかに強力なものであったのかを示している。この点において、Carpenter は一般的な女同士の友情にも同性愛的要素を見出すことができた稀な存在であったが、それは同性愛の普遍化と深く結びついていたと言えよう。

キリスト教と教会の支配から解き放たれてルネサンスに再び開花した時期から現代までの友情を広範囲に駆け巡る最後の章では、Montaigne に始まり、Sidney、Michelangelo、Shakespeare などの書き物、さらには Princess Ann と Lady Churchill の女同士の絆も取り上げられる。そして最後は Whitman の *Leaves*

*of Grass* からの引用で締めくくられるが、Carpenter にとって Whitman の称える友情は、新たな時代を告げるものであり、ギリシャ時代と同じように “social institution” として確立されるべきものであった。“[N]ow Whitman's attitude towards it [comradeship] suggests to us that it really is destined to pass into its third stage, to arise again, and become a recognised factor of modern life, and even in a more extended and perfect form than at first” (177-8). これに続いて、物質主義的なアメリカの民主主義を贖うには “the adhesive love” の普及が必要だという Whitman の *Democratic Vistas* からの引用がなされる。Carpenter はこのアンソロジーにおいて女同士の絆についても触れているが、それは同性愛を普遍化するのに寄与した。他方で、全体として中心に据えられていたのはやはり男同士の絆であった。それは Whitman の言葉が明示するように、“threads of manly friendship, fond and loving, pure and sweet, strong and lifelong” であり、“emotional, muscular, heroic, and refined” (178) である。したがって、問題はこの「男らしさ」に基づく絆を普遍化する一方で、それを脱性化されない同性愛とどのように融合させるのかということになる。

では Carpenter が本格的に同性愛に取り組んでいる “Homogenic Love” に目を移してみたい。彼は 1894 年にセックスについての一連のパンフレットを書き上げた。それらのタイトル、“Woman, and Her Place in a Free Society”、“Marriage in Free Society”、“Sex-Love and Its Place in a Free Society” が示唆するように、それらは当時としてはかなり大胆な主張を含んだものであり、1896 年に *Love's Coming-of-Age: A Series of Papers on the Relations of the Sexes* として纏められ出版された。これと時を同じくして、Carpenter は 1895 年(出版日付は 1894 年)に “Homogenic Love” を発行したが、それは販売されず、興味を持つと考えられる人々に送られた。1895 年に出版するのはほとんど不可能であったし、Carpenter も出版の意図を持っていなかった。1869 年には Karl Maria Kertbeny によって “Homosexual” という語が公にされ、また 1892 年には Richard von Krafft-Ebb-

ing の *Psychopathia Sexualis* の英訳も出版されていたので、“Homogenic”という Carpenter の造語が同性愛を意味するとすぐに理解した人もいただろう。他方イギリスにおいては、議論自体が避けられたために、同性愛が明瞭に語られることは稀であった。そうした状況は、さらに同年の Wilde 裁判によって強められることとなった。そのためこのパンフレットが *The Intermediate Sex* に収録されて出版されたのは 1908 年のことである。<sup>9</sup> ここに収められた版と元々の“Homogenic Love”の間には若干の加筆修正が見られる。前者は本の一部をなすという点で他の章との関係で読まれるべき側面があるので、ここでは後者を見ていきたい。

“Homogenic Love”において Carpenter は、まずギリシャのエピソードやポリネシアの人々に言及しながら、同士愛が人間の原始的な形として見られると主張する。<sup>10</sup> そして文学や芸術を取り上げながら、Michelangelo、Shakespeare、Winckelmann、Tennyson、そして Whitman などの名前を挙げてこの愛の素晴らしさを示す。これは既に考察した *Ioläus* と同様、歴史を通して普遍性を唱えるという手法である。しかしながら、このパンフレットが単なる歴史による正当化ではないことは、続く身体性の議論において明らかになる。Carpenter は、当時の言説においては最も厄介な問題の一つであったソドミーと同志愛の関係に踏み込むのである。まず彼は同性間の愛にも身体的な側面があることを認める。他方で、どの程度の性的行為が適度で自然であるのかという問いについては、明確な答えは与えられないとしながら、次のように述べる。

... in the common mind any intimacy of a bodily nature between two persons of the same sex is so often (in the case of males) set down as a sexual act of the crudest and grossest kind. Indeed the difficulty here is that the majority of people, being incapable perhaps of understanding the inner feeling of the homogenic attachment, find it hard to imagine that the intimacy has any other object than the particular form of sensuality mentioned (i.e. the *Venus aversa*, which appears, be it

said, to be rare in all the northern countries), or that people can be held together by any tie except the most sheerly material one—a view which of course turns the whole subject upside down, and gives rise to violent and no doubt very natural disapprobation; and to endless recriminations and confusion. (9)

このように Carpenter は、内的な感情を重視しながら、特別な形、すなわち肛門性交との距離をとる。しかもそれは“all the northern countries”では稀であると、植民地主義的な視点から語られる。それは“the extreme form” (9) であるとし、さらには多くの関係において、彼が主張する同性間の愛情は明白には性的ではないとさえ述べるのだ。

精神と身体之二項対立に依拠することで、同性愛を脱性化することは 19 世紀後半の同性愛擁護で使われる常套手段であった。Carpenter も *Ioläus* でそれを行っていることは既に見た通りである。他方で、身体的な欲望自体を否定することは、単なる絆に基づいたホモソーシャルな社会の奨励に陥る危険がある。そうすると女性嫌悪的な男性中心主義社会を作り上げるだけで、Carpenter にとって重要である愛の要素が埋もれてしまう。それどころか、既に指摘したように性的関係のないホモソーシャルな絆は、同性愛嫌悪の温床となる。したがって身体を遠ざけながら、いかにそれを保持するのかという問題に Carpenter は直面せざるを得ない。しかも彼が“comradeship”に焦点を当てる際には、“men like me”に限定されない同性愛の普遍化を目指すため、解決はより困難になる。Carpenter はこの問題に明確な答えを出さずに絶えず揺れ動く。彼は、多くの場合では性的ではないと述べたすぐ後で“it may be said to be physical in the sense of embrace and endearment” (9) と付け加える。また、Shakespeare や Michelangelo のソネットを、“the pulsation of a distinct bodily desire” (10) を感じることなく読むことは誰もできないと述べて、身体性を保持するのだ。

身体性に纏わるこうした揺れは、続いて近年の性科学による成果をもとにしながら同志愛を擁護する際にも見受けられる。Carpenter は大陸の科学者の

名を挙げながら、まずは性的倒錯が生まれつきであるという主張を提示する。この立場で同性愛解放運動を展開したパイオニアはUlrichsであるが、彼が依拠していた論理は、生まれつきであるから同性愛は自然なものである、したがって法で罰することは不合理だというものであった。これはソドミーとの差異化に大きく寄与した。Carpenterも同様の論理にしたがいながら、次のように述べる。

Too much emphasis cannot be laid on the distinction between these born lovers of their own sex, and that class of persons, with whom they are so often confused, who out of mere carnal curiosity or extravagance of desire, or from the dearth of opportunities for a more normal satisfaction (as in schools, barracks, etc.) adopt some homosexual practices. In the case of these latter the attraction towards their own sex is merely superficial and temptational, so to speak, and is generally felt by those concerned to be in some degree morbid. In the case of the former it is, as said, so deeply rooted and twined with the mental and emotional life that the person concerned has difficulty in imagining himself affected otherwise than he is; and to him at least the homogenic love appears healthy and natural, and indeed necessary to the concretion of his individuality. (11)

健全で自然な同性愛を主張するためには、それとは異なるソドミーと袂を分かつ必要がある。そして後者が身体に収斂されるとすれば、前者はできるだけ身体から遠ざけられなくてはならない。CarpenterがCrafft-Ebbingを援用して、同性愛者たちが行うと下劣に考えられている“the special act”(12)を、ほとんどの場合、当人たちは嫌っているのだと指摘するのも、こうした動機に裏付けられている。Platoへ話題を移すのもそのため、それは崇高な情熱と結びつけられる。同時にここでも次の一節を加えることで、彼は身体性への余地を残すことを忘れない。“Plato throughout his discourses never suggests for a moment that the love of which he is speaking is any other than the homogenic passion, nor glosses over or

conceals its strong physical substructure”(13)。

身体とソドミーの関係は、Carpenterも指摘するようにユダヤ、キリスト教的教義と共に歴史的に発展してきたものであるが、その論理は実際のところ至って単純である。それは身体的欲望を生殖とのみ結びつけ、それ以外を不自然な行為とみなすというものである。これは実際、その信念の土台は多様であるものの、反同性愛の言説において現代でもしばしば見受けられるものである。これは、いかに性と生殖が人々の認識において深く結びついているのかを表している。したがって、Carpenterの時代から現代に至るまで、同性愛の政治学においては、セクシュアリティが単に生殖に還元されないことを指摘することが重要な項目の一つとなるが、Carpenterの場合は愛というより広範な概念を用いてこれを行う。彼は生殖が愛の唯一の目的と考えることは“pre-judgement of scientists”(15)であると断罪し、病的や不自然という形容を問題化する。確かに、同性愛においても異性愛同様に単なる身体的な欲望が“a mania”(16)になるという感情の過剰は起こる。しかしながら、この本能の表出が概して“the character of normality and healthfulness”(16)を持つことを考えるならば、それは“a distinct variety of the sexual passion”(16)をなすというのが彼の主張だ。

ここから展開される彼の主張は、ある意味で非常に平凡なものである。それは、親密性には子供の問題だけではない多くのものがあるというもの、実際の性行為の影響を別にしても、個人の幸福に不可欠で、健康の必須条件とする要素があるといったものである。Carpenterは“embrace and endearment”(18)から生じる身体的、精神的、道徳的な刺激はどうでもいいという人はいないだろうと、いわば常識に訴えかけるのだ。<sup>11</sup>この点で、彼の主張は非常に穏健で妥当なものと言えよう。そしてここでも身体性が問題の俎上に挙げられるのであるが、親密な行為の程度については当事者の“the good sense and feeling”(19)に任せるしかないものだとして、過剰なものを認めつつも、それがすべての感情表現をタブーにする理由にはならないと述べる。さらにこの方向性を補強するために、再び彼は次のように述べて身



体との距離をとる。

... it is clear, I think, that in the homosexual love—whether between man and man or between woman and woman—the physical side, from the very nature of the case, can never find expression quite so freely and perfectly as in the ordinary heterosexual love; and therefore that there is a ‘natural’ tendency for the former love to run rather more along emotional channels. (19)

身体性を極力遠ざけるべき時には、“I think”という挿入を入れながらも、身体的側面が完璧に表現されないのは明白だと断言さえる。他方で、身体性を保持することも不可欠であるがゆえに、“tendency”という言葉を用いることで、完全な身体性の否定は避けられる。こうした揺れを内包しながら、最終的に Carpenter は異性愛を出産と、同性愛を社会的な仕事と結びつけることによって、身体的な異性愛と精神的な同性愛という二項対立を作り上げるのであるが、そこで持ち出されるのは民主主義の概念である。ここに到達すると、同性愛は単に擁護されるべきものではなく、社会変革をもたらす崇高な力として唱道される。古代のように独裁者はいないとしても、同様に立ち向かうべきさまざまな社会問題がある。そのためには“a comradeship as true and valiant” (23)が必要なのだというのが彼の主張だ。社会主義者でもある彼はさらに、階級を超えた連帯の必要性も唱える。彼がここで実例として挙げる女性解放運動と同性愛の結びつきは、いわゆるボストン・マリッジから 20 世紀後半における分離派フェミニストまでを暗示しており、狭義のレズビアンとは異なる認識を持っていたことを示している。それは、男女ともに普遍的な絆として、エロティックな身体に限定されない欲望を描き出す。それは社会に立ち向かうために必要な自発的な連帯となり、あらゆる人々が持つ属性へと転化されるのだ。ただ、そうなると身体性が置き去りにされ、脱性化された愛の概念だけにとどまる危険が生じる。また、同性愛の特異性も失われる。この問題に Carpenter は明確な答えを与えることなくその時々で揺れ動く。

“Homogenic Love”の最後は法の観点から同士愛

について述べられるのだが、ここでは再びソドミーとの差異化が図られる。1885 年のいわゆる Labouchère Amendment は、公的、私的を問わずに男性間の関係を“acts of gross indecency”として取り締まるものであったが、それとソドミーとを結びつけながら、彼は次のように述べて法的取り締まりに反対する。

Whatever substantial ground the Law may have had for previous statues on this subject—dealing with a specific act (sodomy)—it has surely quite lost it in passing so wide-sweeping a condemnation on all relations between male persons. It has undertaken a censorship over private morals (entirely apart from social results) which is beyond its province, and which—even if it were its province—it could not possibly fulfil...and it has thrown a shadow over even the simplest and most natural expressions of an attachment which may, as we have seen, be of the greatest value in national life. (25-26)

身体的な欲望を認めながらも、過剰な肉欲たるソドミーを特に否定することで、Carpenter は精神性と身体性の均衡を保とうとする。これは、自然な同性愛と逸脱的な同性愛との対立に呼応し、前者のみを健全で社会に不可欠のものとして推進していくことになる。こうした戦略は Symonds などにも見られたものであるが、問題は生まれつきであるのかどうかを明確に見極めることは根本的には不可能であるという点にある。しかし、Carpenter は彼にとっては逸脱の表出たる肛門性交を特異なものとして排除しつつ、どこまでが過度であるのかを曖昧なままにすることでこの問題を回避する。そのため“a censorship over private morals”について指摘しながらも、それ自体を問題化しない。ここの注釈としては、ナポレオン法典について言及しているにも拘わらず、ソドミーを含めたすべての同士愛を肯定するほど Carpenter は大胆ではなかったのだ。

“Homogenic Love”は 1906 年に *The Intermediate Sex* の第三章に、“The Homogenic Attachment”として収録され、出版された。また同年には 1897 年に“An Unknown People”と題されて出版されていたパンフ

レットが“The Intermediate Sex”として、改訂版の *Love's Coming-of-Age* に付け加えられた。そこでこれらに収められたものという観点から、彼の同性愛及び性の解放の議論をさらに見てみたい。

まずは *Love's Coming-of-Age* についてあるが、これには既述の3つのパンフレットがタイトルを変えて収められている。それらの元々のタイトルが示唆するように、ここでは“Free State”における性の在り様—特に女性と結婚—が、現在の抑圧された状態への非難と共に論じられる。最初の“The Sex-Passion”の冒頭での一節、“Next to hunger it [sex] is doubtless the most primitive and imperative of our needs... but the sex desires are strongly restrained, both by law and custom, from satisfaction” (1-2). は、こうした議論の基調となっている。Carpenterにとって、セックスは原始的な欲望として肯定されるべきものなのだ。しかしながら、“Homogenic Love”での主張同様に、単に身体的な衝動を下劣なものとし、その対としての精神的な愛を目指すべきものとして薦める。セックスという身体的な行為について語りながらも、彼はそれを精神化する。身体を犠牲にすることで、高次でより持続的な様相が生まれるというのが彼の考えだ。こうした点では、彼の主張は非常に自制的であり、原始的な欲望としながらも節制が中心となる。しかしながら、ここにおいても彼は完全には身体性を排除しない。感情的で精神的なものへの変容を高らかに推奨した直後に、人生においては身体的な基盤が最も重要であり、どんな形であろうとそれが無くなると、交際は死に絶えやすいと述べるのだ。こうすることで、彼は身体性を保持しながら、セックスに限定されない親密性への道を開く。ここでは同性愛についてはまったく触れられていないものの、“the prime object of Sex is *union*, the physical union as allegory and expression of the real union, and that generation is a secondary object or result of this union” (21). という主張は、明らかに同性愛の擁護としても重要な機能を果たす。それは精神と身体に行き渡る“the idealised Sex-love” (22) という融合として“comradeship”を見据えるのだ。

続く章では女性に対する抑圧の状況が論じられる

が、売春婦だけではなく主婦も男性への経済的依存によって奴隷化されているとして、その根源たる私有財産制度が糾弾される。そして、こうした状況を変えるには、経済的奴隷状態を廃止することで、すべての人々を自由にするしかないと言われる。次の結婚についての章と合わせて考えると、*Love's Coming-of-Age* 全体に流れる思潮は明らかにフェミニズム的と形容できるだろう。<sup>12</sup> しかしながら、「新しい女」による多くの活動を女性たち自身が“unwomanly”と考えてしまっていると指摘しているにも拘らず、Carpenterにはいわゆるジェンダーの概念はほとんどない。基本的に男女は別のものであるとし、至る所で本質主義的な思想を明確に表す。例えば、生理学的な差異によって、女性においてはすべての構造や生活が性的な機能と深く関係し、進化においても多様性が少ない。そのため女性は“the more primitive, the more intuitive, the more emotional” (40) であり、女性にとってセックスは深く神聖な本能で、自然な純真さを持っていると論じられる。Carpenterにとって原始的であることは肯定的なことであるとしても、当時のステレオタイプを無批判に受け入れ、それを称賛することで男女の領域を固定化してしまうのだ。

Man has developed the more active, and Woman the more passive qualities; and it is pretty obvious, here too, that this difference is not only due to centuries of social inequality and of property-marriage, but roots back in some degree to the very nature of their respective sexual functions. That there are permanent complementary distinctions between the male and female, dating first perhaps from sex, and thence spreading over the whole natures, physical, mental and moral, of each, no one can reasonably doubt. (52)

男女の差異が社会によってより強められ、誤解が生じるようになってしまっている。それを考えるには、女性に男性と同等の権利を与え自由にすべきだと論じて、男女の補完性を信じて疑わないがために、男女の領域は固定化される。彼にとって男女は本質的な差異を持つということは絶対的な真理であって、

性の解放がなされたとしてもそれは変わらない。

女性の抑圧と自由への解放を論じた次の章からは、結婚制度についての議論がなされる。Carpenter は、女性の金銭的依存、単なる男性のセックス要望、そして世間体がうわべだけの絆である結婚を維持する動機になっているとして批判する。そしてそれが起こる原因の一つは若者に性教育を行わないためだと考えるが、これによって“a passing sex-spell”と“a true comradeship and devotion” (77) が区別できなくなるのだと述べる。The *Intermediate Sex* においても性教育の必要性が論じられるが、これは“comradeship”としての結婚／絆に結びつく。彼はその他に、女性の自由と自立について、より自由で排他的ではない関係の承認について、そして生涯人をつなぎとめる現在の法の問題について語るが、とりわけ複婚についての提言は“comradeship”との関係で重要である。彼は身体的な性質から男性とは異なり、女性はそれに向いていないとしながらも、次のように述べる。

... it seems very rash to lay down any very hard and fast general laws for the marriage-relation, or to insist that a real and honorable affection can only exist under this or that special form. It is probably through this fact of the variety of love that it does remain possible, in some cases, for married people to have intimacies with outsiders, and yet to continue perfectly true to each other; and in rare instances, for triune and other such relations to be permanently maintained. (105)

Hawkins 夫婦との関係において、実際 Carpenter はこれに近い形を求めた時期があったが、このような主張はかなり進歩的なものと言えよう。さらには真の融合には、生涯続く人工的な契約である結婚という制度は重要ではないという指摘も、今日の反結婚制度の議論と通じる大胆な考えである。その一方で、根底にあるのは非常に単純な理論である。それは、完全な融合は完全な自由を持つ必要があり、個人的なものであるべきというものだ。そのためには、財産についての考えが根本的に変えられる必要がある。そうした社会変革によって、真に自由な愛／結婚／

セックスが達成できるというのが彼の見解なのだ。

このように、Carpenter にとっては社会主義の達成と性の解放は深く結びついている。そしてそれはまた、同性愛の解放と軌を一にする。では、元々は“An Unknown People”と題され、*Love's Coming-of-Age* では“The Intermediate Sex”として収録された章を見てみたい。ここではそのタイトルが示唆するように、中間性としての同性愛の概念が提唱される。まず Carpenter は、男女がまったく別のものではなく、二つの極がある一つのグループでしかないという、Lawrence Birken によるとダーウィニズム以降の考え方とされるものに触れる。そして実際に男女の気質や性質が入り混じった人々がいると論じながら、それらが融合して男女双方の理解者となる“some remarkable and (we think) indispensable types of character” (115) がいると述べ、同性愛者を規定する。そこから、中間性の人の数は少なくなく、また必ずしも病的ではないという大陸での議論を紹介するが、ここでも身体の問題が浮かび上がる。Carpenter は“Homogenic Love”においてと同様に、愛情は必ずしも性的ではないし性行為と結びつかないとして、身体との距離をとる。それは多くの場合“purely emotional” (123) であって、単なる興味でしかない放蕩とは異なるとし、生まれながらという本質主義的思想を持ち出す。

Carpenter は先に触れたようにジェンダーのステレオタイプに疑いを持たないが、それが中間性の議論を支えている。例えば“the male tends to be of a rather gentle, emotional disposition—with defects, if such exist, in the direction of subtlety, evasiveness, timidity, vanity, etc.; while the female is just the opposite—fiery, active, bold and truthful, with defects running to brusqueness and coarseness” (124). と述べて、長所、短所共に、男女のジェンダーを切り分ける。しかも、極端なタイプという議論になると、いわゆる気質ではなく、仕草、針仕事の器用さ、女装への興味から、さらには尻が大きく、しなやかで、顔には毛がなく、声も高いといった具合に、身体的な側面まで「女性らしさ」を男性同性愛者に当てはめる。しかしながら、Carpenter はこうした極端な例は稀

だとして外面的には通常であると述べる。その上で、中間性としての同性愛者を次のように説明する。

If now we come to what may be called the more normal type of the Uranian man, who while possessing thoroughly masculine powers of mind and body, combines with them the tenderer and more emotional soul-nature of the woman—and sometimes to a remarkable degree. Such men, as said, are often muscular and well-built, and not distinguishable in exterior structure and the carriage of body from others of their own sex; but emotionally they are extremely complex, tender, sensitive, pitiful and loving, full of storm of stress, of ferment and fluctuation of the heart. (129)

Carpenter は、女性は直感的であり、養育や看護に特別な才能がある、また芸術気質であるといった、当時の女性のステレオタイプを何の疑いもなく男性同性愛者の特徴として重ね合わせる。これは、彼が女性の長所と考えるものを付与しているに過ぎないのであるが、こうした見解は特に愛において顕著となる。Carpenter によると、男性同性愛者の愛は女性のそれのように優しく深いものであり、感覚的な要素が精神的なものに従属するために、“one of its perfect forms” (130) となり得ると述べるのだ。

女性の同性愛者については、身体は女性でも内的な性質が「男性的」であるとされるが、そこでも男性のステレオタイプが持ち出される。それは“a temperament active, brave, originative, somewhat decisive, not too emotional”、“good at organisation, and well-pleased with positions of responsibility, sometimes indeed making an excellent and generous leader” (132) といった、男性の長所と彼が考えるものである。論理的に言えば、愛については男性の感覚的な要素が増すことになり精神性が薄れることになるはずだが、それについては何の言及もない。ここから浮かび上がるのは、Carpenter は男女の長所と考えるものを恣意的に両者に付与することで、その優位性を説いているという事実だ。これを可能にしているのは、男女の領域を固定化する彼の考えで

ある。だからこそ、同性愛者は“double nature” (134) を持つものと特徴づけられ、“reconcilers and interpreters” (134) という機能を果たすことが可能となるのだ。しかしながら、中間性の理論は“Homogenic Love”での議論や“comradeship”の概念とは相容れない要素を持つ。というのも、前者は基本的には生まれつきという言説にしたがいながら、異性愛者との差異によってその存在意義を強調するのに対して、後者は異性愛者も含めた普遍性に基づいているからである。つまり、彼の二つの議論は、異性愛と同性愛の差異と同一性との間で揺れ動くのだ。さらに問題であるのは、男同士の絆が「男らしさ」を中心にし、その同質的求心性に依拠していたのとは対照的に、中間性では「女らしさ」が男性同性愛者を形作る重要な要素となっている点である。Carpenter はこの矛盾に目を向けることはない。彼は、どちらも優れたものとして、同性愛／同性愛者を昇華しようとするだけである。

では *Love's Coming-of-Age* とは異なり、こうした同性愛の優位性がより積極的に論じられている、本として纏め上げられた *The Intermediate Sex* 全体の議論を追ってみたい。最初の“Introductory”では、中間性としての同性愛の概念に始まり、愛については感覚的ではなく、感情的であると論じられる。そして“reconcilers and interpreters” (14) として社会に特別なことをなすという、“An Unknown People”での主張を繰り返す。さらにここでは社会の主導者としての同性愛者を彼は提唱する。

It is probable that the superior Urnings will become, in affairs of the heart, to a large extent the teachers of future society; and if so that their influence will tend to the realisation and expression of an attachment less exclusively sensual than the average of to-day, and to the diffusion of this in all directions. (14)

同性愛者はこのようにして、本質主義的な特徴を内在したより優れた存在として位置づけられる。続く章には、多少の修正はあるものの *Love's Coming-of-Age* の“The Intermediate Sex”(元々の“An Unknown People”) が配されている。したがって、同性愛者はここでも

特別な存在として考えられている。しかしながら、次の章では“The Homogenic Attachment”として、既に見た“Homogenic Love”が置かれている。ここでは単なる興味から男色を犯すソドミーとの差異が強調されているという点では、同性愛者の特異性が示唆されているものの、歴史的な男同士の絆への言及と制度としての推奨は、こうした愛を普遍化する方向に向かう。また性科学への言及の中で、身体的、精神的な特性は、他の男性や女性と結局は違わないと述べている点でも、異性愛者との同一化が見受けられる。この主張については、女性化、男性化への一般的な傾向があるという注釈をつけているものの、同性間の絆としての愛は“the masses of the people” (76)を通して見られるものであって、特別に同性愛者のみが持つものではないと述べられるのだ。リーダーとしての同性愛者が存在するにしても、民主主義との結びつきを可能にするのは“comradeship”にこうした普遍性を見出し得るからである。Carpenterの議論における差異と同一性に関するこの様な揺れは、この章への加筆によってより強められている。最後のパラグラフでは、同士愛の本能は、生まれながらのものである場合はいくら強制したところで変えられないという、元々のパンフレットにあった一節は削除された。その代わりに、次のような説明が加えられている。

The homogenic attachment, left unrecognised, easily loses some of its best quality and becomes an ephemeral or corrupt thing. Yet, as we have seen..., it may, when occurring between an elder and younger, prove to be an immense educational force; while, as between equals, it may be turned to social and heroic uses, such as can hardly be demanded or expected from the ordinary marriage. It would seem high time, I say, that public opinion should recognise these facts; and so give to this attachment the sanction and dignity which arise from public recognition. (81-82)

全体としてはそのタイトル通り、同性愛者を中間性という特異な存在とみなす議論がなされてきた。しかし、それでは「男らしさ」に基づいた同士愛の普遍

性が失われてしまう。“The Homogenic Attachment”はそれを防ぐものの、逆に中間性の理論との齟齬を引き起こす。ここで唱道されるのは、“men like me”に限定されない連帯であり、同性愛の普遍性なのだ。

こうした態度は、次の“Affection in Education”での主張と通じる。というのも、ここでは教師と若者における教育的効果の側面から議論が始められ、制度としての少年愛の重要性が語られるからだ。しかも若者にとっては、異性への愛はほとんど明言されず、欲されもしないとさえ述べられる。いまだ形成されていない心はそれ自身の理想を必要とするからというのがその理由だ。こうした愛はクレタ島やスパルタなどで流布していたが現代においては誤解されており、そうした愛があっても悪習が盛んで真の愛や友情についての少年の概念は墮落させられている。そうした状況ゆえに、“a decent and healthy attachment” (92)が形成される可能性は低く、少年も年長者に教育されるのではなく、単なる愛玩となり、しかも官能的、性的な習慣が蔓延しているために、感情的な形での真の愛情が阻害されてしまうのだというのがCarpenterの主張だ。ここでの愛情は、明らかに同性愛者に特有のものではない。それは、あらゆる人物(ここでは特に男性)が持つ普遍的な感情なのだ。したがってこの章での議論は、中間性としての同性愛者の愛とは最も乖離したものとなっている。高貴な、理想的な、健全なといった形容がなされるように、ここでの友情が関係するのは異性愛と同性愛との対立ではなく、健全な友情と墮落したそれとなる。そして前者は精神や感情と、後者は身体と官能とそれぞれ結びつく。

And so (we think) the need of attachment must also be met by full recognition of it, and the granting of it expression within all reasonable limits; by the dissemination of a good ideal of friendship and the enlistment of it on the side of manliness and temperance. Is it too much to hope that schools will in time recognise comradeship as a regular institution...? (101)

健全な愛情は教育の基盤であるとするこうした議論は、明らかに少年愛の言説に依拠しており、これ自

体としては成立する。しかしながら、同性愛を普遍化するこの主張は、*The Intermediate Love* というコンテクストにおいては矛盾する。Carpenterはこの問題に目を向けることはない。

そのタイトルが“The Place of the Uranian in Society”であるように、最終章では同性愛者が再び特異なものとして位置づけられる。誰が同性愛者であるのかが広く認知されれば、世間は多くの偉大な先導者がいることを知って驚くことは疑いがないとCarpenterは断言する。他方で、社会に対して有益な仕事を行わない、取るに足らない、或いは“vicious homosexuals” (108) が多くいることも認めており、それは普通の人々と同じだとも述べる。この観点から定義付けられる同性愛者は次のようなものである。

I use the word Uranians to indicate simply those whose lives and activities are inspired by a genuine friendship or love for their own sex, without venturing to specify their individual and particular habits or relations towards those whom they love.... The point is that they are all men, or women, whose most powerful motive comes from the dedication to their own kind, and is bound up with it in some way. (108)

ここでの同性愛者は、“The Intermediate Sex”で述べられたような中間性の要素が驚くほど失われている。しかも身体的に“reserved and continent”な人もいれば、“sensual”な人もいるとして多様性を認める中で (108)、抽象的な愛と友情の概念に基づく親密性だけに焦点が当てられた同性愛者が描かれる。しかしながら、続く一節になると再び“dual nature” (109) が持ち出され、男性的な要素と女性的なそれとを行き来するために、気質としては“exceedingly sensitive and emotional” (109) だとされる。ここでも彼特有の男女の固定化が見え、同性愛者には恣意的に長所が付与されながら特異化される。したがって、こうした中間性と、他方では親密性に基づく視座とが混在してしまい、同性愛者の位置は定まらない。

Carpenterにとっては、同性愛と友情と民主主義は切っても切り離せないものであった。そのため、

民主主義の議論に向かう際には、中間性を持つ同性愛者の特異性ではなく、より普遍的な愛という概念が重要になる。そこで彼は“Uranian spirit” (116) や“Uring societies” (124) という言葉を使って同性愛を普遍化する。それは“a general enthusiasm of Humanity” (116) に繋がるものであり、同性愛者に特異なものではない。彼は次のように明言する。“And it may be true, even as far as his Uranian temperament is concerned, that while this was specially developed in him the germs of it are almost, if not quite, universal” (117). 中間性として特異であった同性愛者の気質は、民主主義達成の議論においては誰にでもあるものと再解釈される。それによって、“comradeship”は担保されながら、同性愛的な欲望も守られる。それを支えるのは、男女のステレオタイプであり、とりわけ女性の愛との近接であった。男性同性愛者が異なるのは、異性愛の男性とは異なり愛をあらゆるものに先立たせるからである。こうした論理によって、Carpenterは男性同性愛者を通常の男性よりも優れたものと位置づけることが可能となる。女性の気質に結びついた男性同性愛者の“love-feeling”とは、“gentler, more sympathetic, more considerate, more a matter of the heart and less one of mere physical satisfaction” (128) なものとして社会改革に不可欠なものなのだ。出発点として“comradeship”がCarpenterの思想の中核をなした。それは民主主義を達成する普遍的なものとして、生涯、重要な指針となった。他方で性科学の議論にも触れることで、中間性を中心に生まれながらの同性愛者という本質主義に傾倒した。そのため、身体性や愛の概念と共に、彼の議論は矛盾を抱えながら揺れ動く。これこそが、彼の同性愛議論に浸透する特徴であり問題なのだ。

複婚や自由な関係性などを含んだ、今日の視点からみてもかなり進歩的な彼の主張は、イギリスにおける同性愛解放にとって大きな一歩であったが、当然のことながら非難を免れたわけではなかった。とりわけ、M. D. O'Brienによる非難は*Sheffield Daily Telegraph*紙上を賑わせた論争として知られている。事の発端は、O'Brienが1909年に“Socialism and Infamy: the Homogenic or Comrade Love Exposed:

An Open Letter in Plain Words for a Socialist Prophet”と題するパンフレットを用いて Carpenter を攻撃したことによる。これは社会主義と結びつけながら、同志愛を糾弾するものであり、まさに Carpenter が危惧していた“comradeship”とソドミーとを同一視するものであった。このことは“practice”という語がしばしば用いられていることから明らかである。例えば O’Brien は次のように述べる。“The practice is entirely without excuse. It is condemned by reason, by Scripture, and by the law of the land.... The treatment of a man as if he were a woman, the kissing, folding, and embracing of him by another person of his own sex is as unnatural and as great a sin against reason as it is possible for any human act to be” (22-23). O’Brien は、“unnatural”という語をしばしば用い、またソドムとゴモラに言及するが、ソドミーとしての同性愛を非難する手法として、それはありふれたものであった。O’Brien にとって敵である社会主義集団がソドミーで繋がっているとすれば、両者を一挙に断罪するのに都合が良かった。この批判に対して Carpenter は 3 月 31 日付の手紙 (新聞掲載は 4 月 6 日) で、自分が墮落させた人などおらず、それは O’Brien の病的な想像力の産物であること、そして *Love's Coming-of-Age* を読んだら分かるように、欲望を掻き立てるのは反対に、あらゆるページで節制が説かれており、“essentially healthy”であると応戦した。その後 4 月 17 日掲載の手紙では、“Homogenic Love”は 15 年前に書かれ“a few scientific friends”にのみ送られたこと、そして後に本として出版した際には“Medical Times”から好評を得たとして、その一部を載せながら“there is no indecent and improper teaching in the book.”と述べている。O’Brien も、当然ながらこうした反論に応じ、執拗に Carpenter を攻撃した。4 月 19 日に掲載されている彼の手紙では、“Medical Times”の書評は民衆を欺くためのものだとし、科学の友人のためのものならばなぜ医療の出版社から出さなかったのかと問い詰めている。また 4 月 24 日掲載の手紙では、“Homogenic Love”と *Love's Coming-of-Age* の“The Intermediate Sex”を比較しながら、後者は単なるスケツ

チだとして、前者における法律についての一節に言及し、ソドミーとの連想を図っている。この論争は約一か月に渡って続いたが、そこには数人からの手紙も加わった。その中には Carpenter を擁護するものだけではなく、“Homogenic Love”の解釈は一つしかなく、それは“a very painful and unpleasant one”だとするものもあった。<sup>13</sup> また Carpenter に好意を持ちながらも、これを読んだ時には驚いたとし、その内容は“demoralising teaching”であり、通常の人の心にとっては“the most subtle poison”を含んでいると指摘するものもあった。<sup>14</sup> 最終的には、当初からこうした話題は一般紙には相応しくないとしていた編者によって、4 月 26 日をもって論争は打ち切られるが、Carpenter が苦慮して差異化しようとした“comradeship”とソドミーは、依然として容易に結びつくものであったことが分かる。ホモソーシャルな男同士の絆は同性愛嫌悪を強く内包しており、同性愛は身体性の忌避を中心にして周縁化されていたのだ。Carpenter は身体と微妙な距離をとりながら、矛盾を抱えながらも民主主義の基盤となる“comradeship”を唱道し、また中間性の概念からも同性愛を擁護しようとした。しかしながら、イギリスにおける同性愛嫌悪の壁は、相変わらずソドミーという文字を刻印した、堅固なものであったのだ。

\*

Havelock Ellis と面識のあった Carpenter は、Symonds が彼と共に *Sexual Inversion* を出版しようとした際に仲立ちとなった。そして Carpenter 自身も、自らの症例を提供した。

My own sexual nature was a mystery to me. I found myself cut off from the understanding of others, felt myself an outcast, and, with a highly loving and clinging temperament, was intensely miserable.... Now—at the age of 37—my ideal of love is a powerful, strongly built man, of my own age or rather younger—preferably of the working class.... Anything effeminate in a man, or anything of the cheap intellectual style, repels me very decisively. I have never had to do with actual paederasty, so-called. My chief desire in

love is bodily nearness or contract, as to sleep naked with a naked friend; the specially sexual, though urgent enough, seems a secondary matter.... I think that for a perfect relationship the actual sex gratifications (whatever they may be) probably hold a less important place in this love than in the other. (46-47)

都築忠七が述べるように、これが書かれたのは1881年頃、Albert FearnoughとCharles Foxと共にブラッドウェーに落ち着き、理想的な愛を手に入っていた時期と考えられる。理想とする相手の体躯や階級は、このことを反映したものと言えるだろう。ここで特に注目しておきたいのは、彼が基本的には身体的なものを二次的に考えている点である。これまで指摘した通り、彼は書物において身体との距離を保ちながらも、単なる絆との差異化を図っていたが、その揺れはこの告白と一致する。とりわけ肛門性交に焦点化されるソドミーをCarpenterは退けていたことが分かる。もう一つ注目すべき点は、男性における「女々しさ」を嫌悪していることである。これについては中間性の理論とは相容れないと言わざるを得ない。もちろん、「女々しさ」は「女性らしさ」とまったく同一ではないのであるが、それでも男性に内在する「女性らしさ」への嫌悪は見逃せない。この告白に基づくならば、Carpenterは第一に階級を超えた、「男らしさ」を中心とした男同士の連帯を求めていたと考えられる。但し、自己の内部においては、中間性を意識していたことも見受けられる。というのも、彼の考えでは女性と結びつけられていた芸術気質を見出し、また“sympathetic, but somewhat indecisive character”(46)を自分は持つと述べているからだ。この種の告白を書物における主張に単純に還元するには注意が必要であるが、それでもここには自己のセクシュアリティの探求と肯定という物語が垣間見られる。*The Intermediate Sex*で述べるように、彼が同性愛に関する文献を書いたのは、同性愛についての世間の誤解を解くとともに、当事者たちが自分自身を理解するのに役立つと考えたからであった。それは、彼の自己探求そのものでもあったと言えよう。

同時代の様々な性科学を参照しながら、彼は同性愛についての議論を展開した。その中心をなした二つの思想は、“comradeship”と中間性の概念であった。そのために全体としては、身体性について、異性愛との差異と同一性について、そして「男性性」と「女性性」との関係について絶えず揺れ動く議論になった。しかしながら、このことは彼の議論は恣意的な戯言に過ぎないということの意味しない。とりわけ、差異と同一性に纏わる問題は、異性愛と同性愛の二項対立を考える上で、重要な視座を与えてくれる。それは、戦略的に差異と同一性を行為遂行的に機能させながら、この境界に関するイデオロギー自体を、セクシュアリティやジェンダーの言説と共に批判的に考察する必要性に目を向けさせる。いずれにしても、様々な問題を孕みながらも、同性愛者を優れたものと捉えながら、その愛を普遍化し、社会に位置づけようとした点に彼の大きな特徴がある。しかしながらそれが容易に成功するほど、世間は甘くなかった。Bernard Shawの次の手紙はそのことを明示している。

I can sympathise with E.C.'s efforts to make people understand that the curious reversal in question is a natural accident.... But to attempt to induce it in normal people would be ruinous, and could seem feasible only to abnormal people who are unable to conceive how frightfully disagreeable—how abominable, in fact—it is to the normal, even to the normal who are abnormally susceptible to natural impulses. (890)

同性愛に理解を示しながらも、同性愛パニックと嫌悪によって、それは他者化される。同性愛が許容されるとしても、それは異質なものである限りにおいてなのだ。Carpenterの挑戦にも拘わらず、残念ながらこうした言説は彼の時代から百年を経た現代でもほとんど変わっていない。

“Civilisation: Its Cause and Cure”で論じるように、イギリスはその文明的な進歩とは裏腹に病に満ちているとCarpenterは考えた。私有財産制度によって民主主義が壊され、あらゆる“unity”が失われていると感じられた。それを回復するには、原初的な状



況に戻ることが求められる。彼はそれをミルソーブでの簡素な生活として実践した。そうした生活が象徴する人間性を取り戻すにはあらゆる制約から解放される必要がある。そこには、自然な感情である“comradeship”や同性愛が含まれる。同時に *Love's Coming-of-Age* が明らかにするように、改革すべき事柄は女性の抑圧や結婚制度などにも及ぶ。この点で、彼の議論は、あらゆる性の解放という広い視野に立ったものであった。ただ、身体性を喚起するセックスというよりは、より広範な愛という抽象的な概念に依拠するために、彼の主張はユートピア的色彩が強くなる。また中間性にしても、女性の解放の議論においても、男女のステレオタイプを問題化するという点まで彼の思想は及ばなかった。しかしその欠点ゆえに、同性愛を“comradeship”と中間性の点から昇華することができた。彼の主張は、「男性性」と「女性性」を固定化しながら両者との関係において揺れ動き、また異性愛との関わりでも差異と同一性とを行き来するという問題を含みながらも、誇りと希望に満ちたものであった。その点で、それは明らかに同性愛解放の歴史において重要な一ページをなしている。それは、同性愛／同性愛者をクローゼットに閉じ込め続ける同性愛嫌悪社会に対する、未だ色あせない抵抗のメッセージなのだ。

## 注

1. Jeffrey Weeks は1977年に出版した *Coming Out* において、今こそ彼の記憶と生涯の仕事を再評価し称えるのに適した時だと述べている。
2. Carpenter を含む19世紀後半から20世紀前半における社会主義と芸術との関係については、Ruth Livesey が詳述している。
3. 例えば宮崎かすみは、Carpenter が Symonds のパイデラスティア論を引き継ぎながら発展させた点について論じている。
4. E. M. Forster は次のように述べている。“If my impression of him is correct, he is not likely to have much earthly immortality. He will always be known to students of the late nineteenth and early twentieth centuries for his pioneer work; for his courage and candour about sex, particularly about homosexuality. . . . But I do not think he will be remembered long either as a man of letters or scientists. . . . Carpenter will never attain it [fame], for the reason that all he gave was the gift of gifts, life itself, the transference of vitality, the sense of peacefulness and power” (80-81). Marie-François Cachin が指摘するように、社会主義運動の変化に伴い、彼の主張が重視されなくなったため、人としての Carpenter により注意が向けられるようになったと考えられる。
5. Carpenter, *My Days and Dreams*, 65.
6. Symonds が Whitman に手紙で問い質したことについて Carpenter は、“Some Friends of Walt Whitman” において次のように非難している。“I think most people will admit that this was a very foolish and mistaken thing to do. No one cares to be pinned down to statement in black and white of his views on a difficult and complex subject.” そして Whitman が認めなかったのは、アメリカの記者たちがあらゆる方法で彼の言葉を曲解することを理解していたからだと述べている。その上で Whitman の意味については次のように論じている。“There is no doubt in my mind that Walt Whitman was before all a lover of the Male. His thoughts turned towards Men first and foremost, and it is no good disguising that fact. A thousand passages in his poems might be quoted in support of that contention—passages in which the male, perfectly naturally and without affectation, figures as the main object of attention, and as the ideal to which his thoughts are directed.” このように明確に述べているのは、これが講演原稿として最初に読まれたのは、Whitman の死から時を経た1922年であったためと考えられる。
7. Whitman は、適当な語の不在について触れながら次のように述べている。“I feel. . . a hundred realities. . . clearly determined in me, that words are not yet formed to represent. Men like me. . . will gradually get to be more and more numerous” (*Daybooks and Notebooks*, 745-746).
8. Whitman, *Daybooks and Notebooks*, 739-740.
9. 一方で、後に *The Intermediate Sex* に収録される“An Unknown People”は、1897年に *The Reformer* から出版されている。
10. パンフレットにおいては、“homogenic love”と“homosexual”とがそれほど区別なく使われているが、本論では特に前者を念頭に置いた時には同士の愛と訳す。
11. これらの議論は *The Intermediate Sex* において削除されて

いる。

12. 但し、女性の解放を唱道するという点ではフェミニズム的であるが、これから論じるように Carpenter の女性についての見解には少なからず問題がある。特に、生殖と女性性に関する彼の本質主義的な思想の限界については、Beverly Thiele を参照。

13. Publico, 9.

14. A Parent, 10.

### 参考文献

- A Parent. Letter. *Sheffield Daily Telegraph* 24 April. 1909: 10.
- Birkin, Lawrence. *Consuming Desire: Sexual Science and the Emergence of a Culture of Abundance, 1871-1914*. Ithaca: Cornell UP, 1988.
- Brown, Tony, ed. *Edward Carpenter and Late Victorian Radicalism*. London: Frank Case, 1990.
- Brady, Sean. *Masculinity and Male Homosexuality in Britain, 1861-1913*. New York: Palgrave Macmillan, 2005.
- Cachin, Marie-François. “‘Non-governmental Society’: Edward Carpenter’s Position in the British Social Movement.” Brown 58-73.
- Carpenter, Edward. “Civilisation: Its Cause and Cure.” *Civilisation: Its Cause and Cure and Other Essays*. London: George Allen and Unwin, 1921. 15-78.
- . *Days with Walt Whitman: With Some Notes on His Life and Work*. London: George Allen & Unwin, 1906.
- . “Homogenic Love, and Its Place in a Free Society.” London: Redundancy Press, n.d.
- . *The Intermediate Sex: A Study of Some Transitional Types of Men and Women*. Manchester: Swan Sonnenschein & Co., 1908.
- , ed. *Ioläus: An Anthology of Friendship*. London: Swan Sonnenschein & Co., 1906.
- . Letter. *Sheffield Daily Telegraph* 6 April. 1909: 9.
- . Letter. *Sheffield Daily Telegraph* 17 April. 1909: 10.
- . *Love’s Coming-of-Age: A Series of Papers on the Relations of the Sexes*. London: George Allen & Unwin, 1915.
- . “Marriage in Free Society.” Manchester: The Labour Press Society, 1894.
- . *My Days and Dreams: Being Autobiographical Notes*. London: George Allen & Unwin, 1916.
- . “Sex-Love, and Its Place in a Free State.” Manchester: The Labour Press Society, 1894.
- . “Some Friends of Walt Whitman: A Study in Sex-Psychology.” *Edward Carpenter Forum*, (1924).
- . *Towards Democracy*. London: George Allen & Unwin, 1915.
- . “An Unknown People.” London: A. & H. B. Bonner, 1905.
- . “Woman, and Her Place in a Free Society.” Manchester: The Labour Press Society, 1894.
- Ellis, Havelock, and John Addington Symonds. *Sexual Inversion*. London: Wilson and Macmillan, 1897.
- Fone, Byrne R. S. *Masculine Landscapes: Walt Whitman and the Homoerotic Text*. Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois UP, 1992.
- Forster, E. M. “Some Memories.” *Edward Carpenter: In Appreciation*. Ed. Gilbert Beith. London: George Allen & Unwin, 1931. 74-81.
- Livesey, Ruth. *Socialism, Sex, and the Culture of Aestheticism in Britain, 1880-1914*. Oxford: Oxford UP, 2007.
- O’Brien, M. D. Letter. *Sheffield Daily Telegraph* 19 April. 1909: 8.
- . Letter. *Sheffield Daily Telegraph* 24 April. 1909: 10.
- . “Socialism and Infamy: the Homogenic or Comrade Love Exposed: An Open Letter in Plain Words for a Socialist Prophet.” *Nineteenth-Century Writings on Homosexuality: A Sourcebook*. Ed. Chris White. London: Routledge, 1999. 20-24.
- Publico, Pro Bono. Letter. *Sheffield Daily Telegraph* 8 April. 1909: 9.
- Rowbotham, Sheila. *Edward Carpenter: A Life of Liberty and Love*. London: Verso, 2008.
- Rowbotham, Sheila, and Jeffrey Weeks. *Socialism and the New Life: The Personal and Sexual Politics of Edward Carpenter and Havelock Ellis*. London: Pluto Press, 1977.
- Russell, Paul. *The Gay 100: A Ranking of the Most Influential Gay Men and Lesbians, Past and Present*. New York: Kensington Books, 1995.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. New York: Columbia UP, 1985.
- Shaw, Bernard. *Collected Letters: 1898-1910*. Ed. Dan H. Laurence. London: Max Reinhardt, 1972.
- Symonds, John Addington. *A Problem in Modern Ethics: Being*

- an Inquiry into the Phenomenon of Sexual Inversion.* London: n.p, 1896.
- Thiele, Beverly. "Coming-of-Age: Edward Carpenter on Sex and Reproduction." Brown 100-125.
- Wallace, Alfred Russel, et al. *Forecasts of the Coming Century*, Manchester: The Labour Press, 1897.
- Weeks, Jeffrey. *Coming Out: Homosexual Politics in Britain from the Nineteenth Century to Present.* London: Quartet Books, 1983.
- Whitman, Walt. *Daybooks and Notebooks.* Ed. William White. 3 vols. New York: New York UP, 1978.
- 都築忠七 『エドワード・カーペンター伝：人類連帯の預言者』 東京：晶文社，1985.
- 宮崎かすみ 「エドワード・カーペンターの同性愛思想：ジョン・アディントン・シモンズとの関わりから」『和光大学表現学部紀要』18（2018）：131-152.

